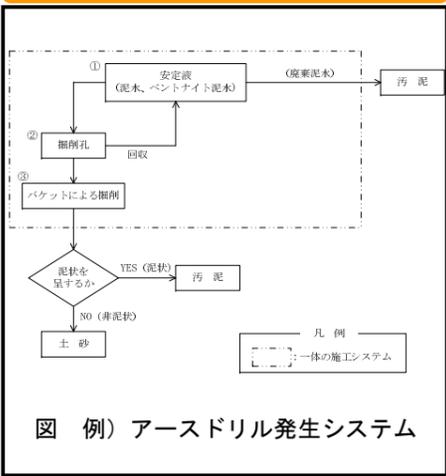
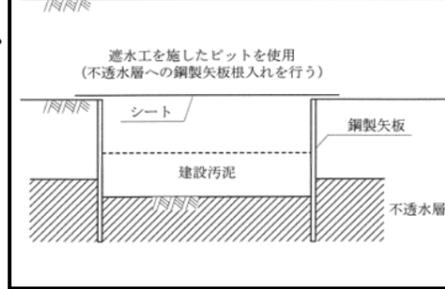
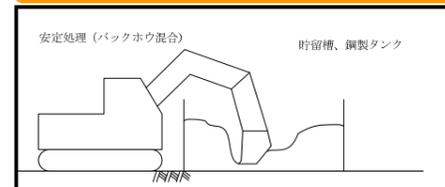
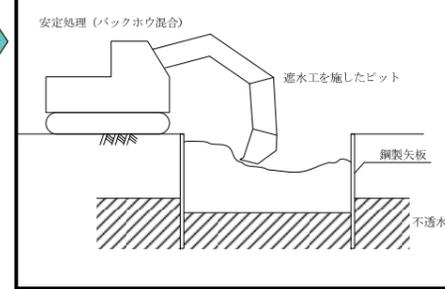
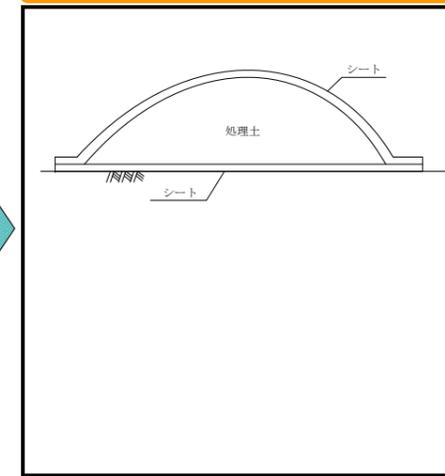


建設汚泥の「自ら利用」時におけるポイント

作業の工程	1. 建設汚泥が発生	2. 廃棄物の保管	3. 廃棄物の処理	4. 有用物の貯蔵・保管	5. 利用
<p>標準例</p>  <p>図 例) アースドリル発生システム</p>	 	 		<ul style="list-style-type: none"> ・工作物の埋戻し ・建築物の埋戻し ・土木構造物の裏込め 等 	
<p>留意点</p>	<p>① 予想発生数量の算出根拠が不明確。 ② 施工時に発生した数量の管理が不十分</p>	<p>① 現実的には、処理基準（保管基準）が不明確。</p>	<p>① 処理基準及び技術基準が不明確。</p>	<p>① 有用物の貯蔵・保管であることから廃棄物処理法の適用が困難なため、不適正処理を誘発する。</p>	<p>① 利用場所（用途）への使用数量の管理を行う。</p>
<p>理由</p>	<p>① 適正処理の確保。 （委託基準等の遵守） ② 適正処理の確保。 （用途外への使用禁止）</p>	<p>① 保管することなく、場外排出しているため。</p>	<p>① 適正な処理を行わず、利用と称した不適正な処理がされる。</p>	<p>① 計画と異なる過剰な数量の利用や品質を満足しないままの利用等、不適正な処理を誘発する。</p>	<p>① 適正処理の確保。 （用途外への使用禁止） → 過剰に余ったものは廃棄物として処理する。</p>
<p>マニュアル上の対策</p>	<p>① 算出根拠の明確化。 ② 施工方法毎における施工管理基準や写真管理基準の策定。 [2. 2 建設汚泥発生時の管理基準]</p>	<p>① 参考となる保管例を示す。 [2. 3 自ら利用における処理基準 (1)]</p>	<p>① 具体的な処理方法を例示した上で、処理基準や施工管理基準及び写真管理基準等を策定する。 [2. 3 自ら利用における処理基準 (2)]</p>	<p>① 廃棄物処理法上の処理基準（保管基準）を適用することを明確化した上で、具体的な処理基準や施工管理基準及び写真管理基準等を策定する。 [2. 4 有用物の貯蔵・保管基準]</p>	<p>① 施工管理基準及び写真管理基準等を策定する。 [2. 5 処理土利用時の基準]</p>

廃棄物処理法上の位置付け

処理基準が適用される範囲

処理基準を適用した方が望ましい範囲

運用上の取り扱い

処理基準を適用する範囲 ※適正処理（計画に基づいた処理）を確保するため。